

令和8年度 新入職員歓迎式典 理事長訓示

皆さん、原子力機構理事長の小口です。本日皆さんを原子力機構の仲間として新たに迎えることができたことを大変うれしく思います。

原子力機構は昨年10月に、旧日本原子力研究所と旧核燃料サイクル開発機構が合併して日本原子力研究開発機構が設立されてからちょうど20年の節目を迎えました。

この間の歩みは決して順風満帆なものではなく、特に2011年3月に発生した東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故により、わが国の原子力事業はいったん歩みを止めましたが、原子力機構もその影響をダイレクトに受け、様々な研究開発活動も一時停止、或いは方向転換のやむなきに至りました。

しかしながら、2022年秋、政府は2050年度までにわが国において脱炭素社会を実現するという大きな政策、所謂GXポリシーを打ち出し、それまでフェードアウトさせるとされた原子力を再生可能エネルギーと共にその実現に向けた有力な手段として位置づけし直したことで、原子力利用の選択肢が大幅に広がり、これにともない原子力機構に対する社会の期待も大いに高まりました。

原子力機構はその性格として、国の原子力政策を現実化する役割を担っています。したがって、この政府の大きな方針転換を受け、2023年4月、原子力機構はこれからチャレンジする研究開発活動の方向性をビジョンという形で機構内外に示しました。

ビジョンのステートメントは「ニュークリア×リニューアブルで拓く新しい未来」とし、今後注力する研究開発分野を

- ① 再生可能エネルギーとの相乗効果の追求
- ② 原子力自体の継続可能性の追求
- ③ 幅広い分野での原子力の活用の追求

の3分野とし、それぞれをシナジー(Synergy)、サステナブル(Sustainable)、ユビキタス(Ubiquitous)とシンプルに呼び習わし、各職員の研究開発業務をこのいずれかに区分することで全職員の立ち位置を明確化しました。

また、新しいビジョンの実現に向けて研究開発体制を刷新・強化する観点から、様々な経営改革を実行し、原子力機構に対する国民、社会からの期待に真に応えられるようトップスピードで走り続けています。

言うまでもなく、このような経営改革は、限られた経営資源を最大活用して大きな成果を挙げるための前提であり、私は理事長としてその先頭に立ち続けております。

更に言えば、時代の要請を受けて、世界において原子力の研究開発は急速な進展を見せており、わが国一国でそのすべてを賄うことはもはや現実的ではありません。そのため原子力機構も多くの海外の研究開発機関や企業との連携を深めています。

しかしながら、皆さんもよくご存じのとおり、世界は激しく動いており必ずしも予見可能な状況にはありません。そのような国際社会の中であって海外との連携を深め、成果を得るためには、将来を見据え自分たちの立ち位置をしっかりと確認することが大切です。彼らが原子力機構と協力してやっていこうと思うためには私たち自身が彼らにとって魅力的な相手であることを示さなければなりません。言い換えれば国際協力とは国際競争でもあるのです。皆さんにはこのことの重要性をぜひ認識してもらい、自らを磨き、これまでの自分の世界から飛び出し、大きな舞台で存分に活躍してもらいたいと思います。

皆さんは、そのような節目に原子力機構の新しい力として仲間入りしました。もちろん皆さんの前には未知の世界が広がっており、中には不安を抱えている人もいるでしょう。またこれまで別の企業や機関で勤務をされ、原子力機構に入っただけの人にはこれまでとの違いに戸惑いを感じるかもしれません。しかしながら心配はご無用です。皆さんを受け入れる職場の人たちは皆さんの着任を心待ちにしています。きっと新しい心躍る毎日が待っていることでしょう。

最後に私からのお願いがあります。原子力機構はその前身の日本原子力研究所、或いは動力炉・核燃料開発事業団や核燃料サイクル開発機構、更にはその前身から数えれば70年の歴史を持っています。また、福島拠点や幌延拠点など比較的新しくできた組織もあります。このような状況下ではどうしても拠点ごとに孤立してしまい、原子力機構としての一体性が薄れるという欠点があります。一般的

にはこのような組織をサイロ構造と呼び、様々なソリューションを目指す上での障害になっています。

皆さんは当然ながら原子力機構の職員として入ってきたのであって、配属される各拠点はその活動実践の場にすぎません。また研究職、技術職、事務職の如何を問わず、これから様々な業務を通じて相互に連携を深め、わが国の原子力を前に進めるエンジンの役割を果たすこととなります。そのためにはサイロに閉じこめるのではなく、原子力機構という大きな枠組みの中でその持てる力を存分に発揮してもらいたいと思います。

原子力機構は新しい社会価値実現のために過去とは一線を画し、新たな一歩を進み出そうとしています。その意味では原子力機構は皆さんと同じ立場にあります。私は個人の成長と組織の成長は軌を一にすることによって最大の成果が挙げられると思っています。このことの意味をよくお考えいただき、ともに歩んで参りましょう。

今日がその記念すべき第一歩になることを祈念して、新たな仲間入りをした皆さんに対する私のメッセージといたします。